

越境の可能性 ——カリブの女性作家——

吉川 佳英子

序

日本で「クレオール」が注目されるようになったのは1990年代であるが、長い間、尊厳を否定され続けてきた黒人たちが自己に目覚め、歴史の不条理の中でカリブに集められて後、数世代による混血化を経て創り出されたのがクレオールの文化である。それぞれに起源を絶たれ、アイデンティティを探し求める人々の動きが、新しい創造のエネルギーと、ここで結び付いたのである。

さて、マリーズ・コンデは、カリブ海グアドループで黒人中産階級家庭に生まれたアンティールの黒人女性である。ネグリチュードの夢を追い、アフリカに回帰を試みたが、その夢が叶うことはなかった。ネイティヴ並みのフランス語は、アフリカで受け入れられることはなかったが、一方、祖国フランスにおいても、彼女の肌の色が彼女に他者性を思い知らせることとなったのである。近年の作家活動は主としてニューヨークでなされているが、彼女の人生はまさに「移動」の連続である。

彼女の最初の小説『ヘレマノコン』以来、多くの作品を書いているが、代表作『セグー』はアフリカを題材とした想像的歴史小説で、フランスでベストセラーになった。また、『わたしはティチューバー・セイラムの黒人魔女』は歴史的事実をもとにした小説であるが、この作品でマリーズ・コンデはフランス女性文学大賞を受賞した。

『わたしはティチューバ』は、セイラムの魔女裁判を題材に、バルバドスの女奴隷がセイラムの魔女裁判に巻き込まれていく過程を丹念にたどっているが、リアリズムの枠に必ずしも捉われることなく、彼女独自の小説世界を自由に創作している。彼女の創作のなかには、主人公が経験したことのなかったフェミニズムのテーマも

巧みに盛り込まれている。

マリーズ・コンデはことさらにフェミニズムを標榜するわけではないが、持ち前のバランス感覚から、カリブ海文学における男性支配が際立った折には、女性作家たちの存在を擁護する。1998年6月の日本における「*La parole des femmes*」と題する講演^④の中では、シュザンヌ・ラカスカード、マイヨット・カベシア、シュザンヌ・セゼール、シモーヌ・シュワルツ＝バルトなどの女性作家の声を紹介している。

マリーズ・コンデの人生は実際、「移動」の連続であったと先に述べたけれども、このような環境が彼女にもたらした物事の捉え方の特徴としては、既存の枠組みに縛られない自由な価値観が挙げられよう。地理的な越境、人種の越境、言語の越境、文化の越境、性の越境等、それはあらゆる面において、しかも易々と成し遂げられているのである。

さて、この「越境」というキーワードからすれば、『わたしはティチューバ』という作品において、我々は何を見出すことができるのだろうか。地理的な越境や文化における越境は言うまでもないが、この小説に特有の「魔術」や「魔女」といったファクターが、作中でマリーズ・コンデの手により、どの様に「越境」の意味付けをなされ、どの様に位置づけされているのか。これらを以下で考察してみたい。

I. 史実をめぐって

セイラムの魔女裁判に関しては、これまで多くの研究が既になされてきた。アメリカ合衆国ニューイングランド地方のマサチューセッツ州セイラム村で1692年3月1日に始まる一連の裁判を指し、まず、セアラ・グッド、セアラ・オズボーン、そしてティチューバが逮捕され、セアラ・オズボーンは監獄内で死亡した。さらに、200名近い村人が魔女として告発され、結局、19名が処刑されたのだった。

事件の経緯は、降霊会に参加していた牧師サミュエル・パリスの娘エリザベスと従姉妹アビゲイル・ウィリアムスが奇妙な行動をとるようになったことから、他の参加者とともに牧師によって悪魔払いが行われた。しかし、これは失敗に終わる。

その結果、サミュエルは黒人の使用人ティチューバが妖術を使ったとして詰問し、拷問するに至る。

この史実を題材にした作品というのは、既に二つ挙げられる。まず、アーサー・ミラーの戯曲『るつぼ』（1953）と、アン・ピートリの『セイラム村のティチューバ』（1964）である。これらは、上で挙げた史実にかなり忠実に従っていると言えるようだ。とは言え、『るつぼ』のテーマは告発による恐怖に力点がおかれているから、ティチューバが登場はするけれども、むしろ政治的抑圧が主たるテーマとして書き込まれている。一方、『セイラム村のティチューバ』の方は、パリス家に仕えるティチューバが主人公で、こちらはティチューバの悲劇である。この女奴隷は次第にセイラムの魔女裁判に巻き込まれていくのである。

これらに対して、マリーズ・コンデの『わたしはティチューバ』は、史実をベースにしてはいるもののフィクションの要素も多分に付け加えられ、よりティチューバがリアルに描かれていると言える。前二作と何より異なる点としては、ティチューバを育ててくれたママ・ヤーヤは、自然を操る不思議な力を彼女に伝授してくれるのだが、この力は良いことのために使われねばならないことがママ・ヤーヤの言葉をとおして強調されている点である。小説中で魔術は人の病気や傷を癒すために使われ、作者がこの不思議な力に向けるまなざしも、決してそれを裁いたり告発したりする性格のものではなく、自然界の一部と見なし得るごとくである。

II. カリブの宗教

「自然を操る不思議な力」と対峙しないカリブの土地にあつて、ではそこでは一体、どのような宗教観が土壌を形成しているのだろうか。

『わたしはティチューバ』のなかで、クリスチアンのスザンナ・エンディコットの家に、夫となるジョン・インディアンとともに仕えることになった時、ティチューバは生まれて初めて祈りの言葉を彼らから教わる。

John Indien joignit mes mains de force et je répétau après lui.

« Je crois en Dieu, le père Tout-Puissant, Créateur du ciel et de la terre... »

Mais ces paroles ne signifiaient rien pour moi. Cela n'avait rien de commun avec ce que Man Yaya m'avait appris⁽²⁾.

キリスト教の教えが、文化を異にするティチューバにとっては何の意味ももたず、彼女の関心を引くはずもなかった。彼女にとって大事なことは、ママ・ヤーヤの数々の教えであり、それに従って風に耳を傾け、海や山や丘のことを知ることであった。

もともとカリブ海地域に生存していたカリブ族などの先住民族は、15世紀にコロンブスがアンティール諸島に初めて到着した後、続くヨーロッパ人の到来により根絶やしにされた。その際、彼らが使っていた言語や文化は失われてしまったのだが、このことはヨーロッパ人の支配のためには都合の良いことであった。後に、アフリカ各地から連れてこられた黒人奴隷たちは、白人入植者の言語や文化、そして地元にかすかに残る先住民族の文化の名残りなどから、様々な要素の混合体の性格を帯びた文化を新たに創り出したのである。従って、西洋社会の人々が信仰しているキリスト教の教えが、そのままの形でカリブで生活する人の宗教心を形成しているとは言いがたい。この地で使われる言語の形成と同様、そのアイデンティティの重要な一部を成す宗教に関しては、極めて複雑であろうと想像され、少なくとも西洋社会のキリスト教の信仰の様子と事情は同じでないはずだ。

それどころか、カリブはその発見当初から、いわれのない宗教的レベルの中傷を浴びることになる。コロンブスにより発見されたばかりの西インド諸島は、既知の世界への侵入者として、西洋社会の人々は特に先住民族に対してカニバル、すなわち「人食い」との恐ろしい噂を立てたのである。それはカリブ族という言葉の響きの類似が少なからず影響したらしい。そしてカニバルのイメージは連れてこられたアフリカの黒人奴隷にも付与される。ただ、「英雄とカニバル」と題した講演の中で、マリーズ・コンデはキリスト教のカニバル的側面について次のように触れている。

[...]カニバリズムは単なる残虐行為ではなく、カトリックの聖体拝領にも似た、

神を冒瀆する意図のない神秘的宗教的行為だったことです。キリストは信徒に、「食べなさい、飲みなさい、これは私の肉であり私の血である」と言いました。まさしくカニバリズムは、特別の力を持ち、恩恵をもたらすと考えられる「他者」の肉を食し、血を飲む行為であり、それを実践する者を豊かにする行為なのです。[...]⁽³⁾

このように、カニバリズムを神秘的行為と捉えられなくはないとも言える。しかし、一般に罪深いと思われるカニバリズムを強引にカリブ族に結び付けることは、カリブの人々から神の救いを奪うことに他ならないから、支配層にとってはこの根拠のない告発も省みるどころではないだろう。

それでは、カリブの住民は自らをどう弁護すれば良いのだろうか。それはまさに、上の引用の中にある「[...]まさしくカニバリズムは、特別の力を持ち、恩恵をもたらすと考えられる「他者」の肉を食し、血を飲む行為」の実践をとおしてなされるのである。『マニフェスト・アントロポファゴ (食人宣言)』を著わしたオズワルド・ジ・アンドラージによると、これは一種のパロディの手法であるようだ。すなわち、彼は「[...]知的植民地主義にピリオドを打ち、西洋の遺産を単に放棄するだけでは十分ではない。神聖化された西洋の遺産を一度解体した上で、これを吸収することが重要だ[...]」⁽⁴⁾と述べる。西洋の権威をパロディをとおしてくつがえし、これを逆に領有するというのだ。言語のレベル、文化のレベルなど種々の側面から、彼らはしたたかに自分たちを守り、かつ充実させる術を編み出したのである。

そのようにして、彼らが守った文化の価値の一つに、独自の自然観がある。『わたしはティチューバ』の中には、主人公ティチューバの感性をとおしてバルバドスやセイラム、アメリカなどの自然が生き生きと描き出されている。

[...] Man Yaya m'apprit à écouter le vent quand il se lève et mesure ses forces au-dessus des cases qu'il se prépare à broyer.

Man Yaya m'apprit la mer. Les montages et les mornes.

Elle m'apprit que tout vit, tout a une âme, un souffle. Que tout doit être respecté. [...] ⁽⁵⁾

ティチューバはママ・ヤーヤに教えられた自然との付き合い方をその後、忠実に守り、自分のなかの「自然」との対話の能力を確実に高めていく。

[...] Je fixai la mer, forêt incendiée. Soudain, un oiseau surgit des braises immobiles et s'éleva tout droit, en direction du soleil. Puis il s'arrêta, décrivit un cercle, s'immobilisa à nouveau avany de reprendre sa foudroyante ascension⁽⁶⁾.

彼女は自然を操るこの不思議な力について自問する。

La faculté de communiquer avec les invisibles, de garder un lieu constant avec les disparus, de soigner, de guérir n'est-elle pas une grâce supérieure de nature à inspirer respect, admiration et gratitude⁽⁷⁾?

実際、死者との交信は彼女にとって、余りに自然なことであった。微かな物音や香りにのって、死んだ母や父やママ・ヤーヤの霊は常に彼女の傍らにやって来た。

[...] Je n'étais jamais seule puisque mes invisibles étaient autour de moi, sans jamais cependant m'oppresser de leur présence⁽⁸⁾.

そんな彼女は、心を許したユダヤ人のベンジャミンに次のように語りかける。

—Sait-tu que la mort n'est qu'un passage dont la porte reste béante⁽⁹⁾?

死の世界と生の世界が通路によりつながっていて、相互に連絡が可能であるという事態は、キリスト教社会の目から見ると極めて驚くべきことであろうけれども、バルバドスやセイラムなどティチューバの生きる世界においては、とても普通で受け入れやすいことであるらしい。死者との交信や、死と生の境界をやすやす越えること、そしてそれにより、「自然」の至るところに死者の霊の宿りを感じ取ること

は、ティチューバ達にとっては、独特の自然観であるとともに宗教観にも通じる。この考え方はいわゆるアニミズムに極めて近いと言えるのではないだろうか。

アニミズムというのは、生物、無機物を問わず全てのものの中に靈魂や靈が宿っているという考え方で、19世紀後半、イギリスの人類学者タイラーが著書『原始文化』の中で使用した。「精霊信仰」と訳され、靈的存在が肉体や物体を支配するという精神観、靈魂観を指し、これは世界的に宗教や習俗の中で存在している。

ティチューバが自然と対話しながら、風や波の音に死者の靈の存在を感じ取り、不思議な力で自然を操った術は、キリスト教では魔術とみなされ一律に悪と判断されるけれども、この地でのアニミズムの風潮を考慮に入れるならば、このような自然との対話の習慣はごく当り前のものとして、日々の習俗の中に溶け込み得る。少なくともアニミズムは、彼女が行ったような不思議な能力の行使のための土壌を十分、準備していると言うことができるだろう。そのうえで、死の世界と生の世界の往来も奇跡のような越境を可能ならしめているのであり、しかも、おとぎ話の世界のように無邪気に易々とその往来を実現しているのである。

III. 小説中の魔術の位置

さてそれでは、いわゆる魔術と呼ばれるものが、この小説においては一体、どのような意味を持ち、どのような位置づけとなっているのだろうか。

ティチューバは育ての母ママ・ヤーヤに、魔術の手ほどきを受けたが、その際、魔術の使い方そのものも詳しく伝授された。そのことを仲間の黒人奴隷に語っている。

—[...] Celle qui ma communiqué sa science, m'a appris à guérir, à apaiser plus qu'à faire du tort. Une fois où, comme toi, je rêvais du pire, elle m'a mise en garde : « Ne deviens pas comme eux qui ne savent que faire le mal !⁽¹⁰⁾ »

ティチューバは自身の黒人奴隷としての過酷な運命を呪い、人生に失望する余り、何度も社会への復讐を思い描く。しかしその都度、悪に手を染めることのできない

自分に気づくのである。

Pour la millièrme fois, je pris la résolution d'être différente, de pousser bec et ongles. Ah ! Changer mon cœur ! En enduire les parois d'un venin de serpent. En faire le réceptacle de sentiments violents et amers. Aimer le mal ! Au lieu de cela, je ne sentais en moi que tendresse et compassion pour les déshérités, révolte devant l'injustice⁽¹¹⁾!

魔術に対して西洋社会は常にこれを敵視し、排斥してきた。しかし、この作品の中では、魔術は癒しの術としてティチューバをはじめとする登場人物たちにむしろ畏敬の念を抱かせるし、魔術に対する偏見や先入観に、しばしば疑問を投げかける。

—...dans cette société, donne-t-on à la fonction de «sorcière» une connotation malfaisante ? La «sorcière» si nous devons employer ce mot, corrige, redresse, console, guérit...⁽¹²⁾

小説中で主人公ティチューバは実際、何度も自分の扱われ方に疑問を抱き、また魔術の受け止められ方にも抗議の声を上げる。

On semblait me craindre. Pourquoi ? [...] Je compris qu'on pensait surtout à mon association avec Man Yaya et qu'on la redoutait. Pourquoi ? Man Yaya n'avait-elle pas employé son don à faire le bien. Sans cesse et encore le bien ? Cette terreur me paraissait une injustice [...]⁽¹³⁾

自然を操る不思議な力である「魔術」をこの作品の中では、あくまでも人を癒す術として位置づけ、魔術の先入観に対しては再三にわたり疑義を呈する。そのことは小説の流れとしては、ティチューバの人間的葛藤を際立たせるとともに、魔女裁判への展開の理不尽さを強調する効果を上げている。それでは、魔術というモチーフは小説の中では、どのような意味を担い、どのような価値を持つのであろうか。

まず、妻に先立たれ悲しみにくれるユダヤ人のベンジャミンが、ティチューバの

魔術のおかげで妻の霊と会い、妻と久々に話す機会を得ることができたように、魔術はしばしば「死」との関わりの中で語られる。ティチューバにとって死んだ家族は実は、彼女の心の中に存在し続け、望めば彼らと意志疎通をはかることができる。

Les morts ne meurent que s'ils meurent dans nos cœurs. Ils vivent si nous les chérissons, si nous honorons leur mémoire, si nous posons sur leurs tombes les mets qui de leur vivant ont eu leurs préférences, si à intervalles réguliers nous nous recueillons pour communiquer dans leur souvenir. Ils sont là, partout autour de nous, avides d'attention, avides d'affection. Quelques mots suffisent à les rameuter, pressant leurs corps invisibles contre les nôtres, impatients de se rendre utiles⁽¹⁴⁾.

魔術の神秘的な力は奇跡的に死者とのコミュニケーションを可能にするが、それゆえにクレオール文化においては、独特の死生観が生まれるようだ。ティチューバの亡き実の母と、育ての親のママ・ヤーヤは霊としてティチューバのもとに現れ、死を厭うティチューバに次のように死生観を説いて聞かせる。

— [...] La mort est une porte que nul ne peut verrouiller. Chacun doit passer par là, à son heure, à son jour. Tu sais bien qu'on peut seulement la tenir ouverte pour ceux que l'on chérit afin qu'ils entrevoient ceux qui les ont laissés⁽¹⁵⁾.

この主張の内容は、ティチューバ自身がベンジャミンに語った「死というのは単に通路に過ぎないし、それに戸はいつも開いていることをご存じですか?」⁽¹⁶⁾という言葉と重なり合うもので、死の世界と生の世界がひとつつながりになっていることを思わせ、キリスト教世界の抱く死生観とは大きく異なっていることを示唆している。死の世界と生の世界の厳密な対峙をうたう西欧社会にあっては、およそ相いれない死の意味付けであり、従って死者とのコミュニケーションを成り立たせている魔術の意味も、西欧社会の価値観に照らしてみるならば、にわかには信じ難いものであるはずだ。

しかしながら、ティチューバは、自身の死後も、「動物の毛皮のピクピクした動きや、四個の石の間で燃えるたき火のパチパチいう音や、川の中でゴボゴボいう虹色のあぶくや、山の上の大木の間をヒューッと通り抜けていく風の音などに、わたしの存在⁽¹⁷⁾」を示すことができ、そういう意味では死と生の二つの世界を自由に往来することも可能で、彼女は「そう、わたしは今、幸せだ。わたしは過去を理解し、現在を読み取り、未来をのぞくことができる⁽¹⁸⁾」。魔術という特殊な能力のおかげで、彼女は生と死を超克し得る果てしない可能性を獲得し、そのために死んで幸せを手に入れることもできるのである。そして、生と死を対峙させない世界の認識の仕方がこの小説全体を貫いているからこそ、我々はこの作品に、世界を眺める視線における楽観性を楽しむこともまた、可能なのである。死者との対話が、のん気なものであればある程、我々は死への恐怖が薄らぎ、カリブのおおらかな自然の風景にも助けられて、楽観的な雰囲気をも十分に味わえるのだ。史実にもとづく作品でありながら、作者マリーズ・コンデは、この点において、小説としての新たな魅力を付け加えることに成功していると思われる。

IV. 作者のことば

『わたしはティチューバ』のエピローグの中で、ティチューバは自分の存在とカリブの島を重ね合わせる。

Et puis, il y a mon île. Je me confonds avec elle. Pas un de ses sentiers que je n'aie parcouru. Pas un de ses ruisseaux dans lequel je ne me sois baignée. Pas un de ses mapoux sur les branches duquel je ne me sois balancée.[...]⁽¹⁹⁾

バルバドス、セイラム、アメリカと生活の場を転々とするのを余儀なくされた彼女のことであるから、そのアイデンティティはさぞや脅かされ続けたことであろうと想像されるが、その実、彼女の心には常に変わることのないバルバドスの島の風景が存在し続けていたのであった。

『私はティチューバ』の作者はマリーズ・コンデであるから、主人公ティチューバの姿の幾分かは、作者マリーズ・コンデ自身を映し出していると言えるであろう。これは過去の史実をもとに書かれた作品とは言え、コンデ以前に小説化された諸作品に比べ、フィクションとしての性格が拡大され、コンデによる創作部分、例えばユダヤ人の愛人のエピソードの挿入などもコンデ作品の特徴の一つと言える。ティチューバは魔術を使うけれども、極めて人間らしく描かれ、魔術の行使にあたって逡巡するところも多々見受けられる。史実を比較的自由に描くコンデであるから、ティチューバに作者マリーズ・コンデの分身を垣間見することも許されなくはないはずだ。マリーズ・コンデ自身は、自分のアイデンティティのよりどころを一体、どこにどの様に見出していたのだろうか。

さて、マリーズ・コンデの作品は近年、特に多く出版されているし、その翻訳また研究書などの出版も後を絶たない。しかし、今のところ伝記はまだ発表されていないので、彼女の半生、それから彼女自身の肉声は随時、企画される講演会、そしてそれをもとにした講演集等の記録により窺い知ることになる。

1998年3月テキサス州オースチンで開かれた「比較文学会」と「アフリカ文学会」の合同学会での基調講演において、マリーズ・コンデは「すばらしき新世界」と題されたもののなかで⁽²⁰⁾、「ディアスポラのアイデンティティ」と「混血の創造性」について触れている。

[...] しかし、よく言われるように、あらゆる移民コミュニティが機能不全に陥り、忘れられたノーマンズ・ランドで暮らし、ルーツを失い、アイデンティティ障害をおこしていると考えるのは、間違いです。[...] 私は逆に、人口移動が豊かさの源であり、移民コミュニティが素晴らしい創造の場になりうると考えます⁽²¹⁾。

ディアスポラは、もともとユダヤ人の民族離散を指すギリシャ語であるが、マリーズ・コンデは移動と彷徨による出会いと変容を自分の住処とするようになり、そういう意味で「ディアスポラの作家」と呼ばれる。ディアスポラの彼女は、アイデ

ンティティを採す旅にこだわるのではなく、移動そのものの持つ豊かさに目を向けるようになる。

[…] つまり、奴隷制時代や植民地支配下において最大の悪と見なされた混血や人種混淆が、今日では価値として認められているのです。混血児はもはや劣った人間でも、社会と自然の秩序を乱すものでもなく、多様な新しい文化的価値のるつぼと見なされるようになったのです⁽²²⁾。

実際、植民地化による混血で文化の混淆が生じ、また同時に言語の雑種性も生まれるに至る。その結果、物の「真正」とは何を指すのか、その概念自体が揺らぎ始め、いわゆるアイデンティティそのものの本質さえ定義があやうくなった。そして、アイデンティティの意味が問い直されることになる。

[…] すでに述べたように、アイデンティティが出生地や肌の色や言語によって定義されないとすれば、それはいった何なのでしょう？ アイデンティティとは単に、ある種の内面的価値にもとづく個人的な選択や決断の問題ではないでしょうか。内面的価値とは、女性のイメージや家族への信仰、また自己や他者、不可視の世界との関係、さらには死に対する態度の総体です⁽²³⁾。

この様に外的要因から離れて、個々人の持つ価値観にのみ基盤をおいた選択や決断の有りようをアイデンティティとあらためて認識するとすれば、ディアスポラの作家たちは何と創造性に富むアイデンティティを備えていることだろうか。

ところで、クレオールというのは、その言語にせよ文化にせよ、もともと歴史上、強いられた大量の人口移動の結果もたらされた国家や文化の境界を越える感性をベースに、それらのボーダーの価値観を排した文化的所産と言えるだろうけれども、マリーズ・コンデはこのクレオール独特の「境界を越える」という行為を、いとも簡単にやってのける作家なのである。

彼女はもとより、移動と彷徨による出会いと変容を自分の住処とし、自身のアイ

デンティティも専ら自己の内面的価値にもとづいて確立しているのであるから、実際、極めて自由で公平な判断が可能な立場にある。ことさらに、「越境」を意識することもなく、また、特にグアドループ・ナショナリストでもなければ、フェミニストを声高に叫ぶのでもない。全ての事象に対して、ひたすらに自由で公平な視線を送るのみである。そして、『わたしはティチューバ』の作品の中では、キリスト教社会においてはごく当たり前とされてきた「生の世界」と「死の世界」の間の境界をも易々と「越境」してしまっている。

クレオール文化独特の「越境」というファクターをも、彼女は簡単に飛び越えて、史実の魔術をいわば小道具に、生と死の越境も難くこなしてしまっているところに、『わたしはティチューバ』の傑作と言われる理由の一つが潜んでいるのではないだろうか。「越境」というのは、常に既存のボーダーを壊しつつ、新たな可能性を一つずつ生み出すことに他ならない。

結び

我々はカリブの女性作家マリーズ・コンデの小説『わたしはティチューバ』を取り上げ、アイデンティティを問うクレオール文学のひとつのヴァリエーションとして、自然を操る不可思議な能力を持つ登場人物たちに注目した。

セイラムの魔女裁判を題材にした小説であるが、コンデ流のアレンジが随所に施されている。カリブ海地域の独自の自然観に裏打ちされたアニミズム信仰は、実際、「死の世界」と「生の世界」を違和感なく共存させ、神秘的な宗教観を可能ならしめる土壌を自然なかたちで作り出している。そのような風土において用いられる魔術という不思議な力は、死者との奇跡的なコミュニケーションを可能にし、それにより、死と生の超克という西洋社会の価値観ではおよそ不可能な試みをも実現させるのである。そして生涯を通じて「移動」を旨とし、様々なレベルにおける「越境」を可能ならしめたマリーズ・コンデは、「死と生の越境」もこの作品の中で、ティチューバという主人公をとおして成し遂げたとと言えるだろう。

注

- (1) Cf. Maryse Condé, *La parole des femmes*, Paris, L'Harmattan, 1979.
- (2) Maryse Condé, *Moi, Tituba sorcière*, Paris, Gallimard, 1998, p.46.
- (3) 三浦信孝編『越境するクレオール』岩波書店、2001年、p.144.
- (4) 同書、p.145.
- (5) *Op.cit.*, p.22.
- (6) *Ibid.*, p.215.
- (7) *Ibid.*, p.34.
- (8) *Ibid.*, pp.24-25.
- (9) *Ibid.*, p.194.
- (10) *Ibid.*, p.109.
- (11) *Ibid.*, p.232.
- (12) *Ibid.*, p.152.
- (13) *Ibid.*, p.26.
- (14) *Ibid.*, p.23.
- (15) *Ibid.*, p.226.
- (16) マリーズ・コンデ『わたしはティチューバ』風呂本惇子他訳、新水社、1998年、p.194.
- (17) 同書、p.273.
- (18) 同書、p.271.
- (19) *Op.cit.*, pp.270-271.
- (20) Cf. «Globalisation et Diaspora», in *Diogenè*, No.184, Paris, oct.-déc. 1998.
- (21) 前掲書、p.197.
- (22) 同書、p.198.
- (23) 同書、p.203.

(京都造形芸術大学准教授)